

〔論 説〕

不変のなかの緊張

—2006年と2020年の東京都23区民「生活意識」調査の比較から—

荒川敏彦

1 「コロナ禍」直前の生活意識

2020年以後、世界は新型コロナウイルス感染症 (covid-19) の拡大によって生活様式を変容せざるを得なくなった。命と健康への不安が募るにもかかわらず、治療に有効な手立てがない。困難に直面したときに人知を超えた領域に期待を寄せることは、いつの時代にも見られるし、それがいかなる形をとるかは文化的に多様である。今回も、日本では疫病に関する妖怪「あまびえ」がSNSを介して注目を集め、イラストを描いたり、グッズ販売までされたりするなど一種流行とすら言える様相を呈した。

しかし考えてみれば、巨大な危機でなくとも、身近な悩みや些細な心配事や不安につき動かされて、人びとは日頃から人知を超えたものに関わってきた。おみくじを引いたり、交通安全や合格祈願のお守りをもったり、テレビや雑誌の占いに一喜一憂したりといった光景は、日常生活に溶け込んでいる。

では、それら福を招き災いを避けようとする意識や行為は、21世紀日本社会に生きる人びとの身近な生活のなかで、どのように遂行・形成され、また変容しているのだろうか。

こうした関心から、筆者も参加する研究プロジェクトでは、新型コロナウイルス感染拡大の直前、2020年1月から2月に、東京都23区民を対象に調査を行った⁽¹⁾(以下、20年調査と略記)。この調査は、本研究プロジェクトが2006年に実施した同様の調査(以下、06年調査と略記)の継続調査という性格ももつ⁽²⁾。標本数や回収方法などが異なるため完全な比較はできないが、調査対象(東京23区在住の20歳から79歳までの男女)や調査票の質問文を同一にし、調査時期を1月中旬以降に揃えるなど、両調査の比較が意味を

(1) 本稿は筆者も参加する生活意識研究会(宇都宮京子(代表)、北條英勝、新津尚子、下村育世、高橋典史)による科学研究費補助金(基盤研究(B)18H00929研究代表者:荒川敏彦)による研究成果の一部である。

(2) この二つの調査の概要は、以下のとおりである。

〈06年調査〉調査対象集団:東京都23区在住の20歳から79歳までの住民男女

標本抽出:二段無作為抽出法

標本数:1,200サンプル(有効回収票724票、回収率60.3%)

実査方法:調査員による訪問留め置き法

調査期間:2006年(平成18年)1月13日から同年1月22日までの10日間

〈20年調査〉調査対象集団:東京都23区在住の20歳から79歳までの住民男女

標本抽出:層化二段無作為抽出法

標本数:5,100サンプル(有効回収票1,701票、回収率33.4%)

実査方法:郵送配布・郵送回収

調査期間:2020年(令和2年)1月17日から同年1月31日までの15日間

もつようできる限り配慮した。本稿ではこの調査結果をもとに、とくに06年調査と20年調査の結果を比較してみたい⁽³⁾。2011年の東日本大震災と原発事故等をはさんだこの14年間は、人びとの意識と行動に変化をもたらしたであろうか。

2. 初詣とお墓参り

はじめに、いくつか基本的なデータを見てみよう。結論から言えば、14年の隔たりがある06年調査と20年調査だが、多くの質問項目において近似した値のデータが得られた。

一例として、その年(2006年および2020年)に初詣に行ったかどうかの結果を見てみよう。これは、二つの調査の調査票で冒頭に置かれた質問である。

表1 今年の初詣

	行った	行かなかった	無回答
06年調査	61.9% (448人)	37.7% (273人)	0.4% (3人)
20年調査	65.7% (1117人)	32.2% (547人)	2.2% (37人)

初詣という「国民的」とも言える大きな行事であるからか、両調査間で初詣に出向く人の比率に大きな差は見られない。

ところで初詣については近年、若者のイベントと化しているイメージがあるかもしれない。しかし06年調査を分析した北條英勝によれば、初詣に行った人について年代による大きな差はなく、むしろ家族関係と密接な関係をもっていた⁽⁴⁾。それから14年後の20年調査について、年代別との関連を示したのが図1である ($p < .01$, $V = 0.113$)。

図1(20年調査)を見ると、20代の参拝者率が他の年代より高いようにも見える。だが、

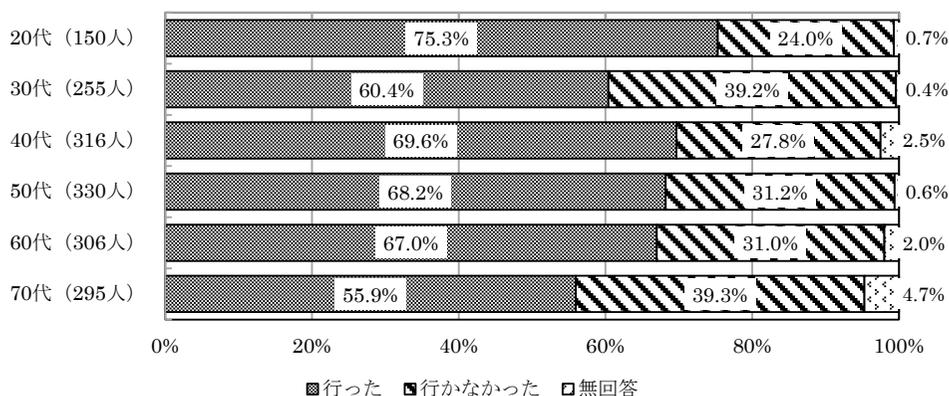


図1 年代別初詣 (20年調査)

(3) 20年調査の結果に関する全体的な概略および分析と比較は、別途発表する予定である。

(4) 北條英勝「第4章 行事・慣行の現代的意味」竹内郁郎・宇都宮京子編『呪術意識と現代社会——東京都23区民調査の社会学的分析』青弓社、77-80頁。06年調査の全体像の提示と個々の問題に関する分析は本書でなされている。

40代から60代まで軒並み7割近くが参拝しており、それほど大きな差があるわけではない。さらに詳細な分析は別稿に譲るとして、さしあたり20年調査からも、初詣を取り立てて「若者」のイベントとは言いがたいという06年調査と同一の傾向を指摘できる。

もう一例見よう。20年調査で82.7%の人が、この3年以内に墓参りをしたと回答している⁽⁵⁾。本研究は、墓参りに行ったかどうかという点だけでなく、むしろそれ以上に、墓前で「自分や家族に良いことがあるようお願いをしたことがある」かどうかという、現象の操作に関心があるかどうか注目した研究プロジェクトである。そのデータをまとめた表2のように、ここでも14年間で大きな差は生じていない。

表2 墓前で自分や家族のための祈願

	ある	ない	無回答
06年調査	67.3% (699人)	32.3% (226人)	0.4% (3人)
20年調査	70.4% (991人)	29.4% (414人)	0.1% (2人)



図2 「ののちゃん」⁽⁶⁾

この質問はもちろん、故人の冥福を祈ることを排除するものではない。亡くなった方の冥福を祈ると共に、生きている自分や家族のための「願い事」をするかどうか、もう少し下世話に言えば、「現世利益」に関わる祈願を墓前でするかどうかを尋ねたものである。そこには「どうぞ私たちを見守っててください」「私が迷ったときには正しい道を示してください」といった広義の「願い」も含まれるだろうし、より直接に、仕事で成功できるよう願ったり、競技で勝利へと導いてほしいと願ったりすることもあるだろう。それらは、故人の霊などに自分に有利になるよう現象に働きかけてもらおうとする「願い事」であると言える。

墓前でそうした振る舞いを不謹慎だとする見方もあるかもしれないが、06年調査でも20年調査でも、約7割の人がそうした願い事を行ってきている様子うかがうことができる。死後は家の守護を司る神的存在となると考える祖霊崇拝的心性を考えれば、それは不謹慎なのではなく、古くからある伝統的な態度であって、7割の人がそれをごく自然に行っていると思われる。

図2は、『朝日新聞』の4コマ漫画「ののちゃん」である。冒頭でののちゃんが「ご先祖様におねがいしていいの?」と、「お願い事」に付着する現世利益的行為の後ろめたさからか、その行為の是非を確認し、おばあさんが「この際ええやろ」と答えるやりとりが、むしろ印象的ですからある。後ろめたさが取り除かれた

(5) 06年調査では「あなたは、お墓参りをしたことがありますか、ありませんか」という、期間に関わらないこれまでの経験を問うたため、96.5%の人が「ある」と回答した。「この3年間」と期間を区切った20年調査との比較はできない。

(6) いしいひさいち「ののちゃん」no. 4645 (2010年8月14日『朝日新聞』朝刊)

とたん、一転してきわめて露骨な願いをしたののちゃんだが、クリスマスのことを忘れていたため、さらにもう一転することになる。これが8月14日付の、つまりお盆の漫画であることから、「お盆」に「墓参り」に行く慣行と、そこでの「願い事」の慣行とを前提としたものであることが分かる。ののちゃんをお願いしているのは、具体的な祖先（おじいちゃん、ひいおじいちゃん、ひいおばあちゃん等）ではなく「ご先祖様」と言われており、願いを聞き届けてもらおうとする対象はそれなりに抽象的である。もちろんケースバイケースであるが、ここでは生前を知っている故人の霊へのお願いというより、願いを叶えてくれる夢のような（クリスマスのサンタクロースのような？）祖先への願い事が観念されているようでもある。

墓前で「祈願」行為が一般的に普及しているからこそこの漫画が理解できるのであって、多くの人が墓参りをするお盆の時期に掲載されたのだろう。7割という墓前で祈願する人の割合は、当面継続していくと思われる。

3. 態度の比較

つぎに、日常生活において行為され意識されている、より身近で日常的な事柄に目を向けてみよう。そのなかでもとくに、現実何らかの影響を及ぼそうとする意識に関わる事柄について、06年調査と20年調査とを比較して見たい。すなわち、(1) おみくじを引くなどの行為を実際にどの程度行っているか、(2) おみくじや厄年などをどの程度気にするか、(3) 絵馬の奉納やお経を唱えるといったことの効果をどの程度信じているか、(4) 超人知的存在の可能性の4点について、06年調査と20年調査のデータを比較してみよう。以下の各グラフでは、各項目の上段に06年調査(n=724)を、下段に20年調査のデータ(n=1701)を示した。

3.1 日常での振るまい

はじめに、「A. 神社やお寺に行ったときにおみくじをひく」「B. 家相・風水の知恵を生活の中に活かす」「C. お寺や神社の前を通る時におじぎをしたり、手を合わせたりする」「D. 新聞、雑誌などの『今月の運勢』といった欄を読む」「E. テレビ番組の占いコーナーを見る」「F. インターネットの占いサイトを見る」「G. 葬式後に塩でお清めをする」の7項目について06年調査と20年調査の結果を比較する（項目Fは06年調査では尋ねていないためここでは省略）。両者を並べて比較したグラフが図3である。

図3を見ると、(A) おみくじを引くことや(C) 寺院や神社の前のおじぎについては、行為する傾向が若干増しているように見える。おみくじを引くのは神社が多いだろう。後述するように、2000年代以降には仏像ブームや神社ブームとも呼ばれる現象があり、テレビをはじめ多様なメディアに寺院や神社が登場する機会が増えた。このデータから確定的なことは言えないが、おみくじを引く等の増加はこうした動向とも関連するかもしれない。

おみくじを引くなどの行為が増加傾向を見せる一方で、運勢を知ろうとする傾向(D・E)については、メディアの違いによって若干の違いが見られた⁽⁷⁾。新聞・雑誌の運勢欄の閲読については06年と20年とではほぼ同じ比率となったが、テレビの運勢コーナーの視聴については若干減少傾向が見られたのである。葬儀後に塩で清める所作についても、若干減

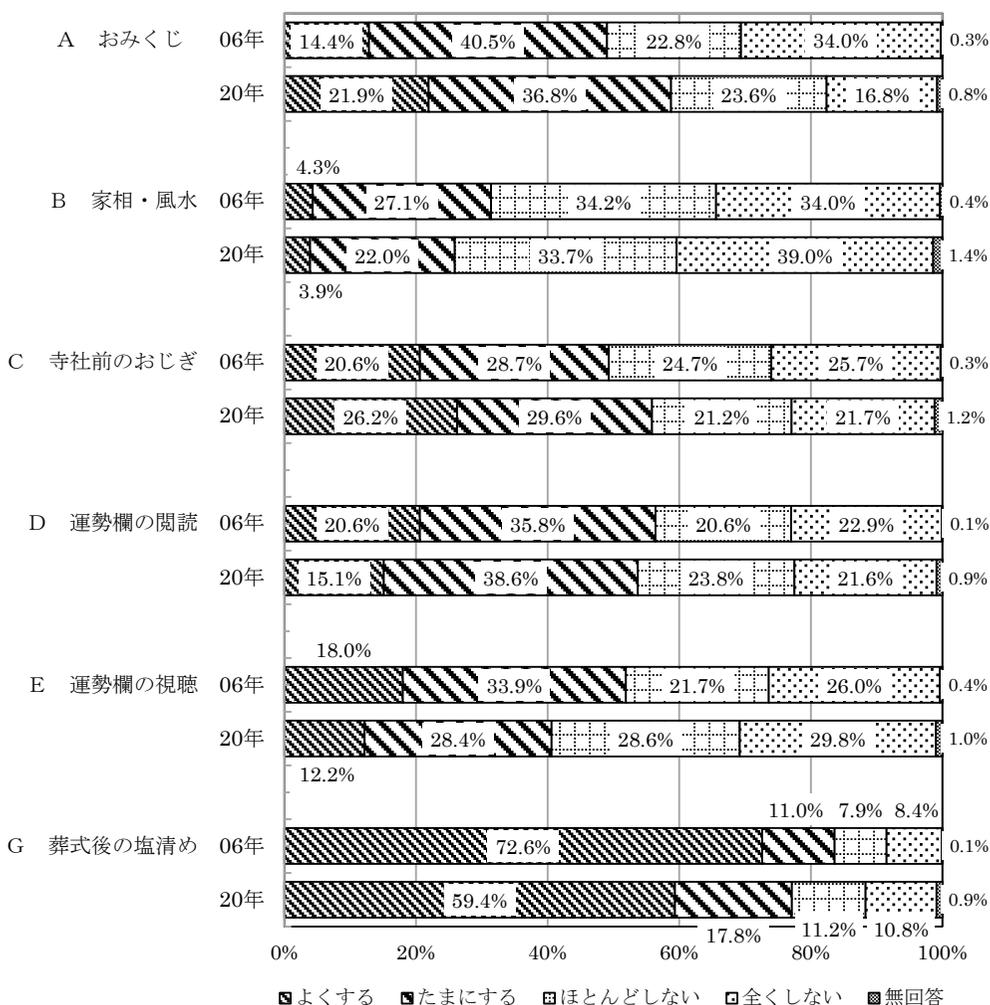


図3 行為の比較

少傾向が見られる。継続調査とは言え二点間の比較には慎重を要するが、葬儀形式や埋葬方式の多様化、現代日本社会における孤独死の問題の深刻化など、死をめぐる場面の変容は、今後いっそうその度合いを強めるだろう。自宅で葬儀を執り行うケースは、とりわけ本調査が対象とする東京23区においては稀になっているだろうと予想される。それは、個人の葬儀経験の減少となる。「穢れ」の意識に伴ってなされる「清め」の儀式的減少傾

(7) ちなみに、新聞・雑誌の運勢欄閲読とテレビの運勢コーナー視聴のデータ（20年調査）について、無回答を除いたクロス集計表は1%水準で有意であり（ $p < .01$, $V = 0.515$ ）、どちらも運勢について関心を寄せた行為であるから当然とも言えるが、両者の強い連関が見られた。すなわち運勢欄についての新聞雑誌とテレビとの関係では、一方のメディアの閲読・視聴を「よくする」人は他方のメディアの視聴・閲読も「よくする」傾向があり、逆に一方を「全くしない」人は他方も「全くしない」傾向がある。

向は、死をめぐる文化的変容の先駆けであるように思われる。

3.2 気にするかどうか

つぎに、吉凶に関わる事柄についてどの程度「気にする」かを尋ねた項目について、06年調査と20年調査の結果を比較してみよう。対象は「A. 神社やお寺のおみくじの結果」「B. 姓名判断の結果(姓名の字画数など)」「C. 家相(風水)」「D. 北枕」「E. 厄年」「F. 忌み言葉」「新聞や雑誌などの『今月の運勢欄』といった欄の結果」の7項目である。

図4を見ると、「北枕」を気にする人の割合が減少しているが、その他の項目について

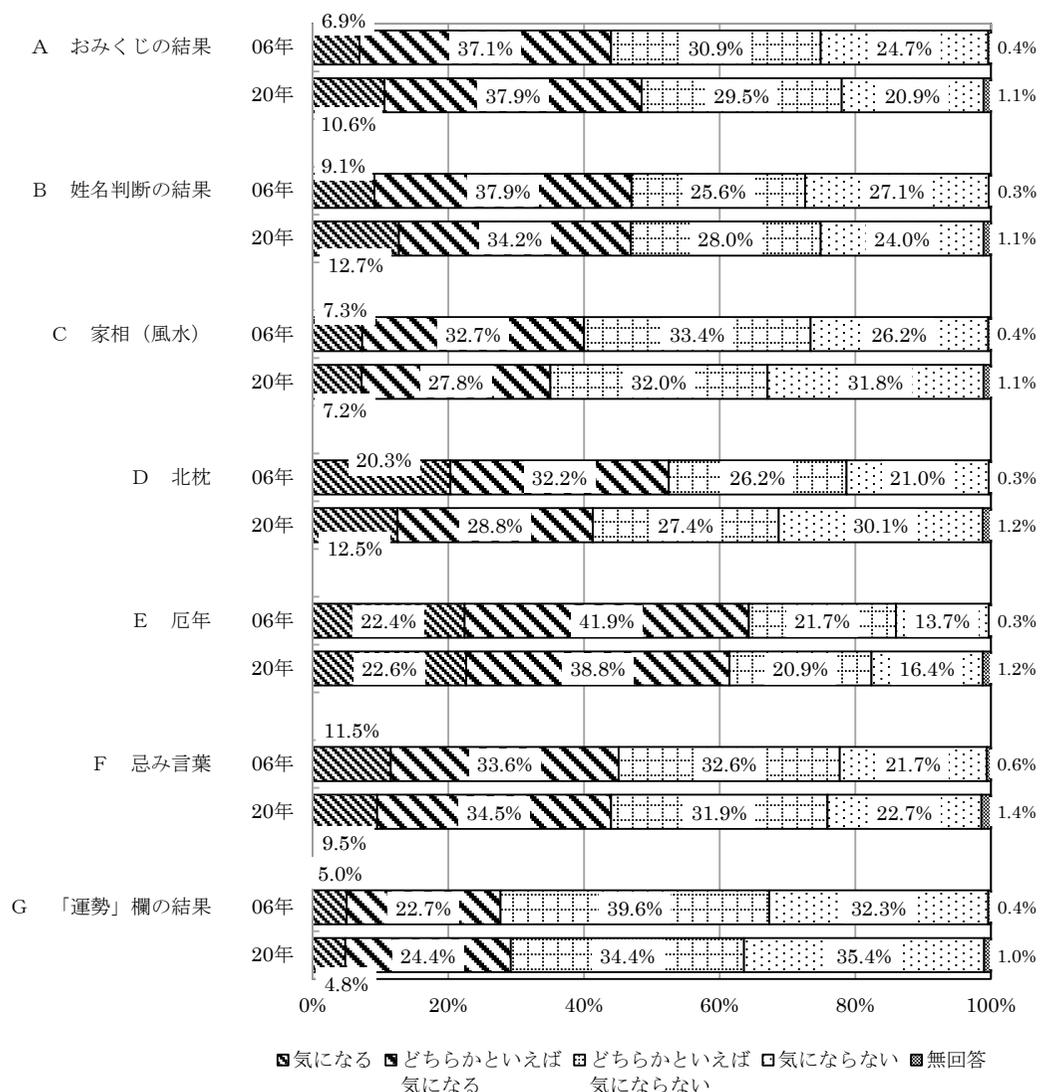


図4 気になる事象

は06年調査と20年調査とでほとんど差が見られない。おみくじの結果を気にする傾向がわずかに増えているようにも見えるが、大差はない。

北枕について補足しておくなら、何かが「気になる」、それをしないと「気持ち悪い」という意識は、普段から関連する事柄に接していたり、口にしていたりすることによって形成されるのだとすれば、自宅での葬儀が減少した現代において「北枕」を気にする機会が減ってきたことが背景にあると考えられる。

3.3 効果についての意識

つぎに、現象を操作するすべについてどの程度までその効果を信じているのかを聞いた項目である「A. 願いが叶うまでの禁欲（酒断ち・茶断ちなど）」「C. 絵馬を奉納する」「E. お経をとなえたり、お祈りをしたりすること⁽⁸⁾」「F. 悪いことが起きたとき、お祓いをしてもらうこと」「G. 呪いをかけること、あるいはかけられること」の5つの現象操作法について、06年から20年の変化を見ていこう。「B. パワースポットに行くこと」と「D. お守りを持つこと」は、06年調査になかった新たな項目であるため比較ができず、ここでは省略する（パワースポットの関連については後述）。

図5を見ると、効果意識についても06年調査と20年調査とに差は見られなかった。「お

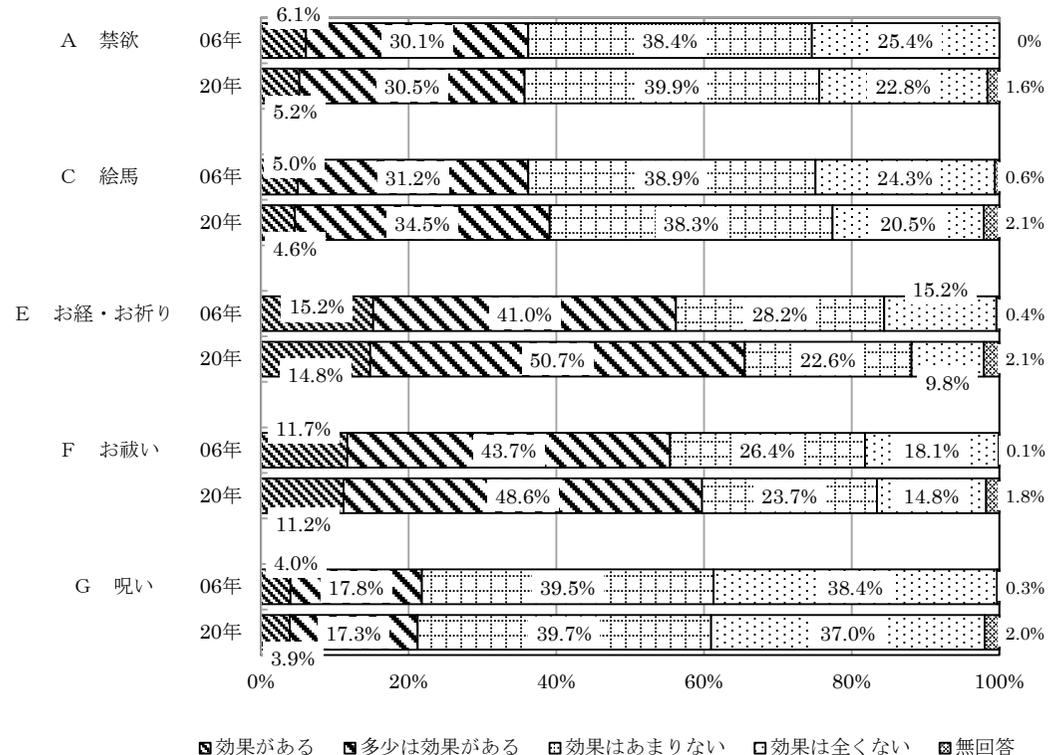


図5 効果意識

(8) これは06年調査では「念仏・お経をとなえる」という項目であった。

経・お祈り」の効果についての肯定感が若干増加しているようにも思えるが、これも大差ではない。ただすでに見たように、おみくじを引く人の割合の微増、神社やお寺の前でおみくじをする割合の微増、おみくじを引くことを気にする人の微増と並べると、「お経・お祈り」の効果について「多少は効果がある」と回答した人についても微増傾向を読み取れるのだとすると、寺院や神社に関連する意識や行為の微増傾向が浮かび上がってくる。これについては、今後の詳細な検討に委ねたい。

ここで、20年調査で新たに加えた質問項目の一つである「パワースポットに行くこと」に効果や影響力があると思うかの質問について瞥見しておこう。各項目の個別分析は本稿の課題ではないが、効果意識との関わりでパワースポットに対する効果の年代別意識 (n=1624) を検証しておく、クロス集計表は1%水準で有意であり (p<.01, V=0.167)、年代によって効果意識が異なっていると言える (図6)。「効果がある」と「多少は効果がある」を合計した効果の「肯定傾向」からは、たしかに60代と70代の高齢層は肯定傾向が低い。しかし、では、それがとくに「若者に特徴的」なのかと言え、20代から50代まで大きな差はなく、パワースポットに対する効果意識が特別に若者に特徴的なものとは言えない。またその肯定傾向は、最も効果肯定率の高い40代でも59.0%であり、たとえば6割を超える「お経・お祈り」の効果への肯定傾向(65.5%)には及ばない(図5参照)⁽⁹⁾。

その背景の一つに、表現のあり方が関わっていないだろうか。すなわち、「パワースポット」というカタカナ語で表現される事象への効果意識よりも、「お経」「お祈り」という漢字で表現される事象への効果意識の方が高まっているとも考えられるのである。それは、一時ブームとなった「ヒーリング」よりも、現代では「癒やし」の方が頻繁に使われているように感じられるのと軌を一にしているように思われる。

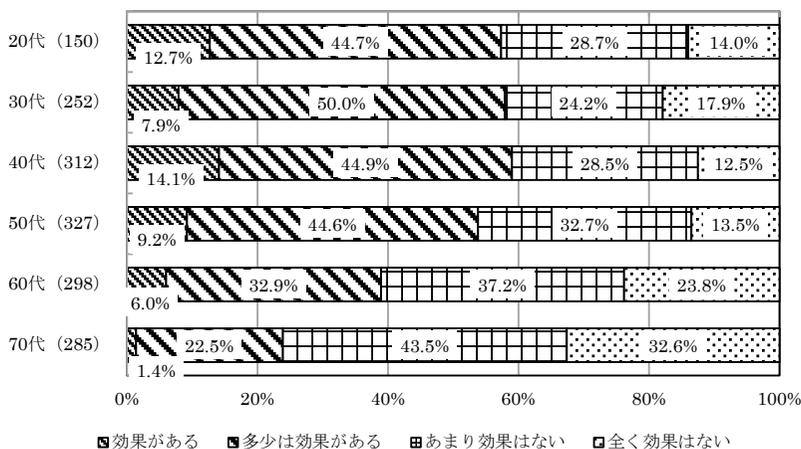


図6 パワースポットに行くことの効果意識×年代差 (20年調査)

(9) 年代別集計で確認しておく、40代の「お経・お祈り」の「肯定傾向」は73.9% (16.8%+57.1%)であり、1%水準で有意 (p<.01, V=0.085)。

3.4 超人知的事柄の可能性についての意識

最後に、ここまで見てきた日常での行為、気にする度合い、効果への意識と密接に関連すると考えられる、超人知的事象や存在の可能性に関する意識を見よう。06年調査と20年調査では、「A. 運がいい・わるい」「B. ご縁がある・ない」「C. 縁起がいい・わるい」「D. 生まれ変わり」「F. 虫の知らせ」「G. 直感・インスピレーション」「H. 山川草木などに自然の霊が宿る」「I. 守護霊」「J. 神や仏」について、それらが「実際にありうることだと思いますか」と尋ねた（図7）⁽¹⁰⁾。

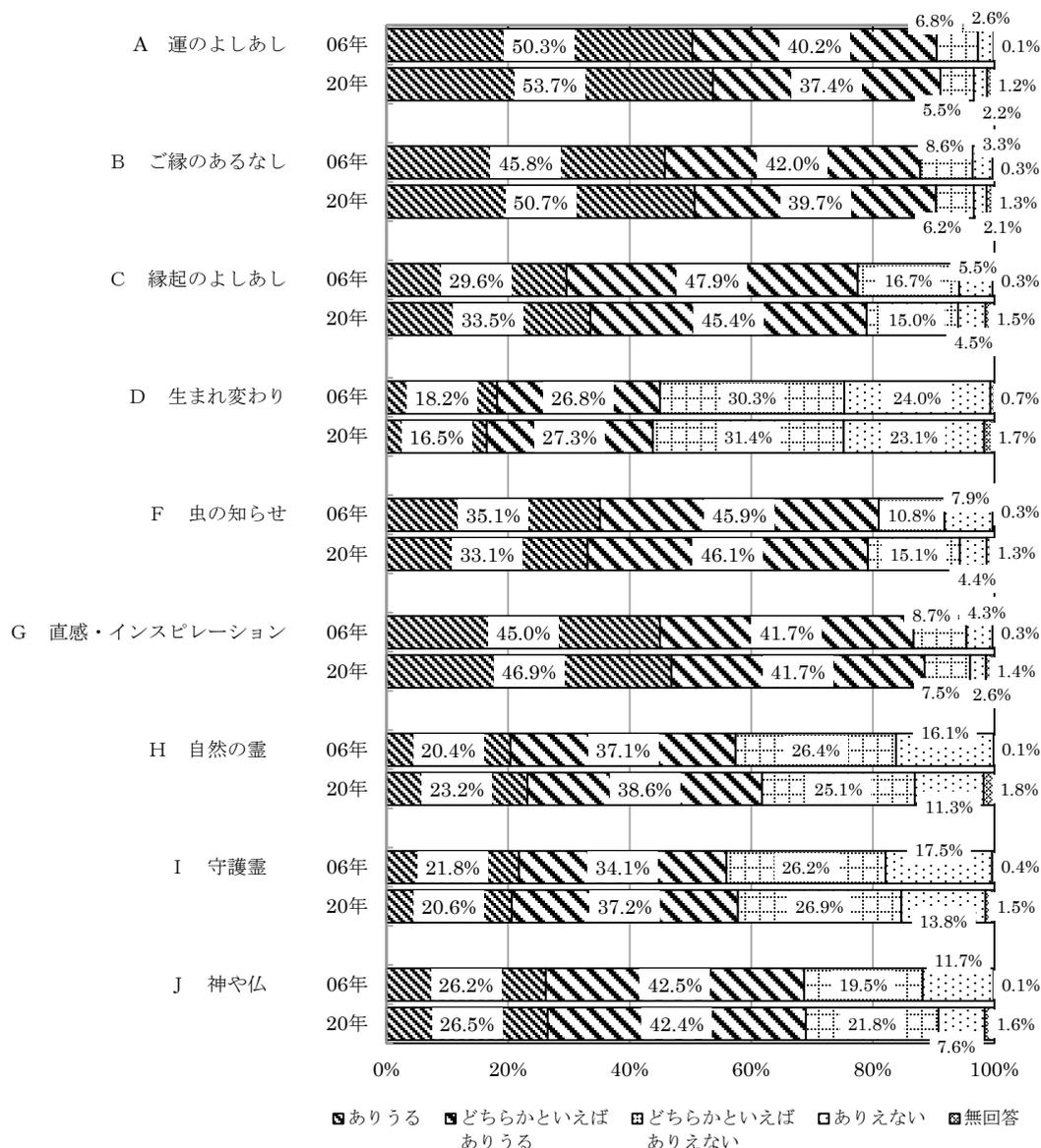


図7 超人知的存在の可能性

見て分かる通り、どの項目の値も驚くほど変化がなく、ほぼ同じ値を示した。二時点の比較にすぎないが、ここまでデータが一致することを踏まえれば、2006年から2020年にかけての14年間では、超人知的事象がありうるかどうかについての意識にはほとんど変化が生じなかったとみてよいだろう。それは、ここで尋ねた事柄の存在可能性についての意識が、肯定であろうと否定であろうと（少なくとも東京23区に在住する）人びとの間に強く根を張っていると思わせるものである⁽¹¹⁾。なかでも、「運」や「直感・インスピレーション」が多くの人に信じられている状態が、人びとの「社会」や「政治」への意識にどのような関連をもつかは重要な問題であろう⁽¹²⁾。

4. 「変わらない」ことの構造的把握と社会的背景に向けて

すべてにおいてではないが、2006年1月から2020年1月のデータを比較して見たとき、14年を経ても大きな変化が見られないことを見てきた。この14年という時を埋めるデータが手許にないのが残念であるが、この間に、たとえば2011年3月11日の東日本大震災および原発事故による、(本調査が対象とした)東京23区も含めた甚大な災害がもたらされ、天皇の代替わり、安倍晋三長期政権(歴代最長)など歴史的な出来事も多々あった。近年頻発する自然災害も、人びとに「運命」や人間の無力感、科学技術の限界を思い至らせる契機となりうる。しかし多くの項目、とりわけ「3.4」(図7)に見た超人知的事象の可能性についての意識は、肯定が増えたわけでも、否定が増えたわけでもなく、ほぼ一定であった。

私たちはむしろ、この「変わらないさ」を把握しておく必要があるのではないか。現在、新型コロナウイルスの感染問題によって生活様式は一新されようとしており、それだけでなくデジタル化、AI化の波は、今後の生活様式を大きく転換させようとしている時代である。生活や労働の場だけでなく、ドローン兵器など自律型兵器の技術が急速に拡大し「戦争」観が大きく変われば、多方面に影響が及ぶだろう。VR技術も、人びとの「現実」認識を変えようとしている。

時代の回転はますます速くなるばかりであるが、少なくとも現在、生活の中に息づく(どちらかと言えば伝統的な)儀礼や超感性的な事柄についての意識や振る舞いは、一定の割合で確認できる。これほどの急激な社会的変化のなかでも変化しない意識や行動があるな

(10) 20年調査では新たに「E. 因果応報」を加えたが、06年調査との比較ができないのでここでは省く。

(11) もちろんデータについては詳細に検証する必要がある。さしあたり二点指摘しておく。06年調査と20年調査とでは男女比に差がある。06年調査では男:女=48.3%:51.7%だったが、20年調査では男:女:その他・答へたくない=43.0%:56.1%:1.0%であり、やや女性の割合が多くなっていることは重要である。また、日本社会の高齢化の反映ではあるのだが、平均年齢も高くなっている。06年調査では回答者の平均年齢は46.3歳だったが、20年調査では52.1歳となっている。06年調査の分析から、性別と年齢(年代)はきわめて重要な要因となることが知られており、今後、この結果を踏まえた検証が必要である。下村育世、2010、「第8章 若年層の『呪術』とその特徴——高齢層との比較のなかで」竹内郁郎・宇都宮京子編『呪術意識と現代社会』青弓社。

(12) 20年調査では具体的に収入状況や支持政党なども尋ねている(06年調査では諸般の理由から断念した項目であった)。それらの関連を踏まえた分析は、今後の課題である。

ら、その背後には、強固な意識構造・社会構造があると仮定することは、今後の社会理論的考察を進めるうえで重要な点となるだろう。

ただし、それらの「不変」と見える行為や意識が、本当に「変わらず」あるのかどうかは検討を要する。変化なく続いているように見える背後では、類似するものや異質なものとの「せめぎ合い」が絶えずなされ、その緊張関係ないし闘争のなかで一定の状態が保たれている、あるいは更新され続けていると考えることができるからである。

そう見たとき、06年調査から20年調査については、先に触れた「強固な意識構造・社会構造」を要因とする以外にも、少なくともさらに二つの視点がありうる。一つは、調査の項目となった行為や意識は、短期的には変化しない「心性」に関わっているという可能性である。もう一つは、2006年と2020年の各調査時点でそれぞれ「特殊要因」があり、データが一致したのはただ偶然が重なっただけであるという可能性である。このいずれであるとしても、必要なことは調査をめぐる時代の社会的背景の検討であろう。

本稿でその詳細を見ることはできないが、本研究プロジェクトに関連する要素をいくつかあげておきたい⁽¹³⁾。たとえばメディアの影響力を踏まえれば、06年調査の時期は、「江原啓之スペシャル 天国からの手紙」(2004年～2007年、フジテレビ)や「オーラの泉」(国分太一・美輪明宏・江原啓之のオーラの泉)(2005年～2009年、テレビ朝日)などの番組が好評を博していた時代であったことが、調査項目の少なからぬ部分に影響を与えた可能性を否定はできない。

けれどもそれらの番組が終了して10年以上経った20年調査においても、調査結果に大きな変化は見られなかった。2012年には新語・流行語(『現代用語の基礎知識』選)のトップテン内に「終活」が入ったことにも見られるように、「死」をいかに迎えるかの問題意識が、従来とは異なるかたちで緩やかに広がっていった。その背後には、2007年に日本社会が「超高齢社会」(65歳以上人口が全人口の21%以上)になったこともあるし、「孤独死」の増加もある。06年調査、20年調査とも東京都23区民を対象にした調査だが、内閣府の『高齢社会白書』によれば、(23区以外も含む)東京都内で「孤立死と考えられる事例が多数発生」しており、東京都監察医務院のデータによると「東京23区内における一人暮らしで65歳以上の人の自宅での死亡者数は、平成28(2016)年に3,179人となっている」と述べられている⁽¹⁴⁾。人びとの死生観が本研究の調査項目のそれぞれと関連していることは十分に考えられる。20年調査では死生観についての項目はないが、広く人生観や科学観についての項目があり、それらと関連させた分析が重要となる。

その数はあまりに膨大だが、もう少しマスメディア状況を追っておくと、2014年から2017年にかけて「お坊さんバラエティー ぶっちゃけ寺」(テレビ朝日)が放送され、2019年の大晦日に生放送スペシャルが放送されるなど、その後も時おりスペシャル番組

(13) 日本の近年の宗教事情については、堀江正宗編、2018、『現代日本の宗教事情 国内編 I』岩波書店が大変参考になる。

(14) 内閣府「平成30年版高齢社会白書(全体版)」(https://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2018/html/zenbun/sl_2_4.html, 2020年1月17日閲覧)。また「孤独死」については、以下の拙著も参照(荒川敏彦、2020、『働く喜び』の喪失——ヴェーバー『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』を読み直す』現代書館)。

が放送されている。またNHKは2018年から2020年に「NHKテレビ 趣味どきっ! 福を呼ぶ! ニッポン神社めぐり」を放送している。同じくNHKの食事番組「サラめし」では、僧侶の食事やカトリック神父の食事生活風景が放送されるなど、大小取り混ぜて「宗教」に関わるさまざまな番組が放送されている。もちろん「世界遺産」関連をはじめ、歴史的な寺院や神社を取りあげた旅行番組は数知れない。

また、この二つの調査の間には、たとえば2009年には東京国立博物館をはじめとした「国宝 阿修羅展」で総来場者数が190万人を超えて入場者の最高を記録し、ネット上でもさまざまに話題となった。また2013年は神宮(伊勢神宮)の式年遷宮(遷御)にあたり、内宮と外宮をあわせ年間1420万人を超える参拝者が伊勢神宮に足を運んだ⁽¹⁵⁾。それと前後して「御朱印ブーム」も広がっている。政府肝いりの(とくに訪日外国人の)旅行客を目当てにした経済振興策も、これらの動きに結びついていただろう。

すでに見てきたように、06年と20年の二つの調査の間には、寺院や神社に関連する事柄への肯定的な傾向の「微増」が見られる。詳細な分析はこれからだが、20年調査データの背後にある、次々と新たに立ち上げられる寺院や仏閣、僧職や神職、聖職者を扱ったテレビやSNSの情報が及ぼす影響を無視することはできない。それは、結果として生活意識の現状を次々と更新しながら維持し、少しずつ変容させてきている可能性がある。

本稿では、新型コロナウイルス感染拡大のまさに直前となる2020年1月に行った生活意識調査のデータについて、同一テーマで2006年1月に実施した調査データとの経年比較を行った。多くの項目に「変化のなさ」が見出されたことが、そこに潜む強固な構造的要因あるいは緊張関係についての問題を提起しているように思える。今後の検討の中でこれらの問題に取り組んでいきたい。

[参考文献]

- 荒川敏彦, 2020, 『「働く喜び」の喪失——ヴェーバー『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』を読み直す』現代書館。
- 堀江正宗(責任編集), 2018, 『いま宗教に向きあう1 現代日本の宗教事情 国内編I』岩波書店。
- 北條英勝, 2010, 「行事・慣行の現代的意味」竹内郁郎・宇都宮京子『呪術意識と現代社会——東京都23区民調査の社会的分析』青弓社。
- いしいひさいち「ののちゃん」no. 4645 (2010年8月14日『朝日新聞』朝刊)
- 奥野修司, 2017, 『魂でもいいから、そばにいて——3・11後の霊体験を聞く』新潮社。
- 下村育世, 2010, 「第8章 若年層の『呪術』とその特徴——高齢層との比較のなかで」竹内郁郎・宇都宮京子編『呪術意識と現代社会』青弓社。

(15) 「伊勢神宮参拝者数、7年連続800万人超え 初詣客でにぎわう」『伊勢志摩経済新聞』(2019年1月1日付)
(<https://iseshima.keizai.biz/headline/3127/>, 2021年1月17日閲覧)

〔インターネット参照〕

「伊勢神宮参拝者数、7年連続 800 万人超え 初詣客でにぎわう」『伊勢志摩経済新聞』(2019年1月1日付) (<https://iseshima.keizai.biz/headline/3127/>, 2021年1月17日閲覧)
内閣府「平成30年版高齢社会白書(全体版)」(https://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2018/html/zenbun/s1_2_4.html, 2020年1月17日閲覧)

本論文は、JSPS 科研費(基盤研究(B)) 18H00929 の助成を受けた研究成果の一部です。

(2021.1.21 受稿, 2021.3.17 受理)

〔抄 録〕

本稿では、東京都23区在住の20歳～79歳までの男女を対象として2006年と2020年に実施した生活意識調査のデータ、すなわち、(1)初詣に行ったかどうか、(2)お墓参りに行ったかどうか、(3)墓参に際して自分のために願い事をするかどうか、さらに、(4)神社でおみじくを引くかどうかなどの「行為」の頻度、(5)おみくじの結果や姓名判断などを「気にする」かどうか、(6)絵馬やお祓いなどの「効果」についての意識(パワースポットに行くことの効果意識も含む)、(7)運のよしあしや守護霊など「超人知的事柄の存在可能性」についての意識、を比較した。2006年調査と2020年調査の結果は、多くの項目において近似した値を示し、この間の生活意識の「不変」である状況を示した。しかし、その変化のなさの中に、まさに変化をさせない構造的要因、および変化のなさの背後で次々と展開されている社会的文化的要因が考えられ、その析出が今後の社会理論における重要な課題として浮上した。